

④ 『一穂のともしび』

にわか寺子屋は繁盛した。夕飯をこ馳走になり、泊まるよう促されたミチは、夜更けまで三人の先生役を務めた。小さなちやぶ台の真ん中に百目蠟燭を立て、カヨ、安吉、壮太の三人が頬をくつつけるようにして、ミチが書いた言葉を、表と首っ引きで読んでいる。

「や、ま、の、こ、だ、ま、山のことだ、だ。」と安吉が読むと、壮太は少し遅れて「山のこだまだ」となぞって、安吉の顔を頼もしそうに眺めた。カヨも納得して小さく頷いた。蠟燭の灯がゆらゆら揺れている。三人が表の中の文字を探すのに集中して無言になった時など、灯は一瞬、筆の穂先のように綺麗な形を見せ、静かに四人を照らした。

ミチが書いて渡す短い文を、夢中になって次々に読んでいく姿は、カヨもそうだが、特に安吉の真剣さにミチは舌を巻いた。

三人が読み終わると、ミチはまだ白い部分に別の言葉を書いて渡す。それを待ちきれない安吉は、ミチの手許を覗き込み、書くはしから表の中の文字を探した。

何度か同じ文字を使うと、表を見なくても読める文字が増えて来た。二文字三文字の単語だとたちまち答えが返って来るようになった。

安吉は、短いのはつまらないからもっと長くしろ、という。そればかりか、父親から届いた手紙の漢字にふりがなを付けてくれ、自分で読んでみたいと言った。

一年の内、ほんのひと月足らずしか家に居ない父親の苦勞を、安吉は充分理解していた。口数は少ないが、久しぶりに帰ると、ごつごつと節くれだった手で安吉と壮太の頬を撫で「大きゅうなつたの」と言う。

安吉は撫でられる度に父親の手を、孟宗の根っこみたいだ、と思う。そして抱き寄せられた時の、土埃に似たお父うの匂いが大好きだった。

その大好きなお父うに、一日でも早く手紙を書けるようになりたいのだ。

もつとやりたい、と言う安吉を半ば強引に寝るようにカヨが言ったのは大方四つ(午後十時)を回っていただろう。

「だって、おぼさんは明日いなくなっちゃうじゃないか」と安吉も懸命に抵抗したが、カヨは許さなかった。ミチに氣を遣ったに違いなかった。

翌朝、戸口で三人に別れの挨拶をするミチに安吉は「おぼさん有難う。きつと読み書きが出来るように毎日稽古をする。また来てくれたら、上手くなったのを見てもらえるの……」と言って涙をぬぐった。

カヨに教えられた通り塩名田で往還を外れ、北に向かう道

に入った。

両側から灌木が迫る道を抜けると、広いすすきの原が現れた。恐らく屋根を葺く材料を確保する為の茅場だろう。明るい午前の中、白い穂が乾いた風に揺れていた。

その白い穂をかすめるようにアカネの群も飛んでいる。そして、その原を分けて、道が一筋北へ延びていた。

何処かでヨシキリの声が聞こえた。するとその声を打ち消すように、一段甲高くホオジロの声も聞こえて来た。時折白い穂を揺らして通り過ぎる風が頬に心地よく、上田まで歩くつもりのミチの足取りは軽かった。

軽い足取りの中で頭に浮かんで来たのは、別れたばかりの安吉の顔だった。

苦労を一人で引き受けている優しい父親に手紙を書きたい一心で、懸命に文字を覚えようとする姿はミチの胸を熱くした。

「俺たち字が読めるようになるの？」と言った時の、あの、驚きと期待と喜びが混じりあった安吉の目の輝きを、ミチは生涯忘れることはないだろう。

たった一晚の先生だったけど、あれほど目に力を持った子供に出会ったのも、あれほど物事に集中出来る子供と知り合えたのも初めてだった。

農民の子どもが自分の人生を変えることが出来るとするなら、それは学問。

万巻の書を読み、万民に頼られる、農民の中の一穂のともしび、になって欲しい。昨夜の、にわか寺子屋の百目蠟燭のように。

翌朝も良い天気だった。通りの両側に柳が植えられ、落ちていた家並が続く上田の宿を過ぎる頃、ミチの胸の中には十一年前の忘れられない記憶が甦って来た。

あの日、ミチが千曲川を離れ姨捨山に向かって歩き始めた頃の空に、嵐の気配など微塵も無かった。

登りにかかって暫く歩いた所で一人の農夫を見かけた。一町ほど先の畑で鍬を振るっていた。

その農夫が尼僧の姿をみとめ、お辞儀をした。ミチは笠の端を少し持ち上げて辞儀をし、それに応えた。その時の、たったそれだけの微かな縁がミチの難儀を救った。

山道を登りながら、今夜は山頂で月を眺め、星を数えて一夜を過ごそう、と決めていた。空は青く澄んで、ゆつたりと夏雲が西へゆくのが見えていた。

山頂に着いた頃は、まだ日暮れまでに十分な時間があるはずだった。ところが、千曲川の向こうの山に掛かっていた黒雲がたちまち空を埋め、辺りが日暮れを思わせる薄暗さに変わると、山をも流す豪雨と暴風になった。

岩陰に身をひそめたミチだったが、容赦なく襲い掛かる激しい雨と風にいたぶられ、体中の熱を失いやがて気を失って

しまった。

翌朝、強く何度も肩を揺すられて気が付いた。明けきらない朝もやの中でしきりに

「尼さん！尼さん！」と呼びかけていたのは、昨日、畑でミチにお辞儀をした農夫だった。傳五郎だと言った。

傳五郎は、大嵐に急変した山を尼が下りた心配が無いのを心配して、暗い内から山に登りミチを探したのだ。

お辞儀を交わしただけの他人を気遣って、夜の明けない内から山に登るなど、ミチはその時、傳五郎のことを仏の化身だと思った。

あれから十一年の歳月が流れた。厳しい暮らしの所為か、五十歳という年齢よりも老けて見えた傳五郎夫婦だったが、六十を過ぎた今も元気だろうか。

どうしても、もう一度会って礼が言いたい。どうぞ変わらぬ元気でいて欲しい。気掛かりはそれだけだった。

見覚えのある家が見えて来た。ミチは胸の高鳴りを抑え戸口に立った。すると、かまどの前でほど木を折っていた女房が振り向き、少しの間ミチを凝視していたが、何も言わずいきなり裏口から駆けだして行った。

暫くして、傳五郎の袖を引きながら息を切らして戻って来た女房が「菊舎さんですよね？」と言った。

「永い間のご無沙汰申し訳ありません。あれからずっと、お二人のご親切が忘れられず、どうしても、もう一度お会い

したくてやって参りました。」

遙か長門の国を出て半年、いや、姨捨山の難儀を助けられて十一年、ミチはやつと二人に会えた。

傳五郎がミチの肩に手を置いて

「よく元気な顔を見せてくださった。わしらもこれほど嬉しいことは無い」と言えば

「そうですよ。また会えるなんて思ってもいなかった：」
と言つて女房は、土間にしゃがみ込んでしゃくり上げた。

傳五郎の目から涙が溢れるのを見ると、ミチも涙を抑えることが出来なかった。

しゃがんで女房の肩を抱いた。すると傳五郎までしゃがみ込んでしまい、肩を抱き合った三人の嗚咽が、狭い土間にいつまでも響いていた。

この旅を思い立った時に、懐かしい信州の山並みや三年も居続けた江戸の景色と共にミチの胸の中に浮かんで来たのは、傳五郎夫婦の姿だった。

ミチの忘れられない記憶。姨捨で出会った傳五郎夫婦の優しい想い出は、ミチの心の中にいつも温かく、いつまでも明るく灯り続ける『一穂のともしび』だったのだ。